

平成29年11月10日(金)  
奈良新聞

# 飲水思源

自動車販売のリーダー

16

## □ 菊池武三郎伝

菊池武三郎は各地に出向き、販売店の将来について説明して説得を続けた。その上で、武三郎と山口昇は販売組合の総会で強行採決をしようと、名古屋で全国自動車販売組合の臨時総会を招集した。

だが、やはり総会は荒れた。東京自動車販売社長、長崎自動車販売社長、長崎の金森近寿ら旧日産系の抵抗もあった。分業案は難航。しかし各地での説得が奏功した。採決の結果、分業案は可決された。

武三郎の回想録を見ても、この時の苦心が並大抵ではなかったことがうかがえる。メーカー別の販売店に分けなければ国産車は競争がなく発展しないと考えたこと、分業案に賛成してくれたのが豊田社長で日産は反対であつたことなどが記されている。またこの分業が、自分が自動車業界に入つて手掛けた大きな仕事だつたとも振り返っている。

分業直後には独占禁止

## 分業案の可決と移籍話

若き日の業師寺の高田好胤師(左端)に案内される神谷正太郎氏(中央)と武三郎(右端)



タの山口と向してもいいとの日産系親交を深め、その関係で豊田喜一郎、神谷正太郎に接して次第に親近感を持つようになった。武三郎の心はトヨタの将来に賭ける方向に傾いていく。

全国的自動車配給代表者を招いて発表した神谷のトヨタ販売店設立構想を聞いた旧日産ディーラーの金森近寿は、日産社長の山本惣治に、トヨタの代理店構想が進んでいて、このままでは取り残されると注意を促した。その後、旧日産系の中心であり自動車販売組合理事長の武三郎がトヨタに行くとの情報が出た。山本

## 「トヨタ」に心が傾く

法が制定された。早く分離した販売店は助かったが、上部機関だった日本自動車配給は解散を余儀なくされた。

武三郎は戦時中の自動車配給協議会の専務理事で、戦後の自動車販売組合の理事長だった。戦時中にコンビを組んだトヨ

戦後のトヨタに武三郎を誘おうと、神谷に働きかけたのは山口だった。

武三郎は武三郎に事実をたがし、熱心に翻意をうながした。(文中敬称略) 二つづく、毎週金曜日掲載